

日米間の自由貿易協定が締結に向けて合意された。その中で日本政府は、米国産牛肉を輸入する際の関税について、現在の38・5%を段階的に引き下げ、最終的に9%にすることを受け入れている。こうなるとただでさえ弱い日本産の牛肉の競争力がさらに弱体化し、日本の食卓が米国産牛肉によって席巻され、占拠される危険性が増幅するといえる。

USビーフは薬漬け

米国産牛肉には成長を早め太らせるために、肥育ホルモン剤や抗生物質、さらには赤身を増やすラクトバミンが使われている可能性が強い。それに加えて最近、相変わらずウシ成長ホルモン剤が使用されていることもわかった。

これらの薬剤は、牛や豚、鶏などの食肉生産の効率を高めるために使用されている。肥育ホルモン剤で現在使用されているのは、合成ホルモン剤3種類、天然ホルモン剤3種類の全6種類。天然のものに関しては残留基準値が設定されており、合成のものに関してはJECFA (FAO/WHO合同食品添加物専門会議) によって出されている残留基準値が、コーデックス委員会により国際基準となっており、日本もその基準を採用している。合成型ホルモン剤は、

ホルモン剤使用の危険な米国産牛肉が関税引き下げで日本に押し寄せる

米国産牛肉の関税引き下げを受け入れた日本。今後、どんどん値段が下がるでしょう。でもUSビーフにはホルモン剤などの薬剤が使用され、牛にも人間にも大きな害があるのです。



天笠 啓祐

酢酸メンゲステロール、酢酸トレンボロン、ゼラノールの3種類。天然型ホルモン剤は、17β-エストラジオール、プロゲステロン、テストステロンの3種類。

日本政府は肥育ホルモン剤そのものを認可していないため、日本の牛肉生産にはこれらすべてが使われていないが、肉や乳製品などの輸入は認めている。なぜ肥育ホルモン剤が危険かという点、それが微量でも肉や乳製品などに残留して、人間の体内に取り込まれると内分泌(ホルモン)が攪乱されるため、さまざまな病気や障害になりやすくなるからである。

加えて、今年初めに発表された論文で、すでに使用されなくなったと見られていた成長ホルモン剤も、相変わらず使用されている可能性が高いことが示された。

成長ホルモン剤は肥育ホルモン剤と異なり、文字通り細胞分裂を活性化して成長を意図的に早めることができる。それに対して肥育ホルモン剤はすべて性ホルモン、あるいはその働きのある物質である。前出の17β-エストラジオール、プロゲステロンはメスのホルモン、テストステロンはオスのホルモンであり、酢酸トレンボロンはオスのホルモンのアンドロゲン作用があり、ゼラノールと酢酸メンゲステロールはメスのホルモン

のエストロゲン作用がある。性ホルモン剤を使用すると、肥育を促すだけでなく、オスのホルモン剤では牛をより筋肉質にでき、メスのホルモン剤ではより柔らかい肉を作り出すことができる。しかし、さらに効率よく成長を促すために成長ホルモン剤が使われていると思われる。

この論文は『公衆衛生と栄養 (Public Health Nutrition)』2019年2月27日号に掲載されたもので、米国アトランタにあるエモリー医科大学のジャン・A・ウエルシュらが、ウシ成長ホルモン(bGH)、およびそのホルモンに関連して肝臓で分泌されるインシュリン様成長因子(IGF-1)の調査を行なった。一般に販売されている牛乳と有機飼育された牛乳を比較したところ、有機飼育された牛はこれらがごく微量であったのに比べて、通常に飼育された牛の場合、bGHの中央値は9・8 ng/ml、IGF-1の中央値は3・5 ng/mlだった。これに比べて有機飼育の場合、bGHの中央値は0・5 ng/ml、IGF-1の中央値は1・1 ng/mlだった。結論としてこの研究者は、この差は、一般に飼育される牛には成長ホルモン剤の使用が示唆されると述べ、有機飼育した牛から製造された乳や肉やそこから作られた